

チャレンジの軌跡

つねに時代の先を読み、進化を重ねてきたホンダの75年の歴史をもとに、経営・施策・製品・技術などさまざまな視点から史実を抽出。激変する時代背景や社会環境の変化の中で、いくつもの難問を受け止め、緩むことなくチャレンジを続けてきた軌跡を掲載しました。

1950年代

夢と情熱を胸に 果敢な挑戦を重ねていく

従業員34人、資本金100万円。浜松の小さな町工場からのスタートであった。描いた夢に向かって情熱のまま駆け抜けた。事業はカブ号F型の発売を機に構築した独自の販売網と優れた二輪製品で急成長。ホンダはスーパーカブC100の日米ヒットやマン島TTレース出場を経て、二輪業界で確固たる地位を手にする。



1950年代の日本

1951年、サンフランシスコ平和条約が結ばれ、国際的に日本の戦争状態が終結。同時に日米安全保障条約(旧)が締結された。経済においては朝鮮特需によって各産業での生産が大幅に拡大。政府による重要産業に対する税制優遇措置と相まって、鉱工業・製造業・エネルギー各業界の設備投資が活発に進み、その後の日本経済発展への礎が築かれていった。

ホンダのトピック

「良品に国境なし」を証明した独創のプロダクト

「手の内に入るものをつくれ」という本田宗一郎の言葉のもと、誰にでも扱いやすいサイズや機能的なデザインを追求。それまでにない新しい乗りものとして誕生した。50ccでは量産が困難とされていた4ストロークエンジン、レバー操作不要の自動遠心クラッチなど、数々の新機軸を惜しみなく投入。今なお一貫したデザインコンセプトを守り続け、世界中で愛されている。



スーパーカブC100(1958年)

ホンダ初となる本格オートバイを発売

ドリームD型(1949年)



より速く快適で、本格的な二輪車を目指して開発。国産二輪車は鋼管フレームが主流だった当時において、量産性が高いプレス鋼板のチャネルフレームの採用と美しいマルーン色に塗装された車体は一際目を引いた。またクラッチ操作を必要としない、チェンジペダルだけで変速ができる2速トランスミッションも開発。誰もが簡単に扱えるオートバイへの挑戦だった。

つくる人、本田宗一郎。売る人、藤澤武夫

両者の出会い(1949年)



初対面は1949年8月。互いに一目で気に入ったという。性格が全く違い仕事の得意分野もまるで違っていたが、気の合った理由を「こっちの持っていないものを、あっちが持っていたからだ」と異口同音に語った。つくる人、本田宗一郎。売る人、藤澤武夫。まさに適材適所の極みであり、見果てぬ夢を本気で語り合い共有できるコンビの誕生である。

DM戦略で普及した自転車用補助エンジン

カブ号F型(1952年)



戦後復興とともに補助エンジン付自転車が重要な移動手段となり、数え切れない競合商品がひしめく中「白いタンクに赤いエンジン」の斬新なデザインで一世を風靡。また当時専務であった藤澤武夫の大胆なアイデアのもと、全国の自転車販売店にカブ号F型の魅力を紹介したDMを発送すると応募が殺到し、400店余りしかなかった販売網が約1万3,000店まで拡大した。

若い力で挑んだ世界の壁

マン島TTレース出場(1959年)



1954年、ホンダは世界最高峰と言われていたマン島TTレースへの出場を宣言。社運をかけた大プロジェクトを任せられたのは河島喜好を監督とする20代の若者たちであった。世界との力の差を痛感しながらも前進を繰り返し、1959年のマン島TTレース初参戦ではメーカーチーム賞を獲得。その後も勝負は止まらず、1961年にはついに悲願の優勝を果たした。

世の中の動き

主な本編掲載項目

1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959
<ul style="list-style-type: none"> GHQ、企業合理化3原則を発表 自動車工業会設立 経済安定本部、経済復興五カ年計画発表 	<ul style="list-style-type: none"> ドッジライン宣言 単一為替レート、1ドル360円 日本工業規格(JIS規格)制定 北大西洋条約機構(NATO)調印 	<ul style="list-style-type: none"> 公職選挙法公布 朝鮮戦争勃発 国勢調査、日本の総人口8,319万人 	<ul style="list-style-type: none"> WHO(世界保健機関)日本の加盟を承認 日米安全保障条約調印 自動車登録令公布 	<ul style="list-style-type: none"> 日本、IMFに正式加盟 道路交通取締令施行 軽自動車免許制定 	<ul style="list-style-type: none"> NHK東京テレビ局、本放送開始 日米友好通商航海条約調印 日米安全保障条約調印 朝鮮戦争休戦協定、板門店で調印 	<ul style="list-style-type: none"> 第1回全日本自動車ショー開催 二輪車のサイクル区別撤廃合理的配列措置実施 第1次道路整備5カ年計画決定 神武景気始まる 	<ul style="list-style-type: none"> 通産省、国民車構想を発表 日本、GATTに正式加盟 初のトランジスタラジオ発売(ソニー) 	<ul style="list-style-type: none"> 経済白書「日本経済の成長と近代化」発表 日本、国連に加盟 日本道路公団設立 	<ul style="list-style-type: none"> 南極地域予備観測隊、観測基地を「昭和基地」と命名 国産車愛用を閣議決定 欧州経済共同市場(EEC)条約調印 	<ul style="list-style-type: none"> 東京タワー完工 関門国道トンネル開通 岩戸景気始まる 初のインスタントラーメン発売(日清食品) 	<ul style="list-style-type: none"> 交通事故死者数、初の1万人突破 対米貿易額、戦後初の黒字 ドルが替自由化 伊勢湾台風
<ul style="list-style-type: none"> 本田技研工業株式会社を設立 	<ul style="list-style-type: none"> 藤澤武夫が常務取締役として入社 C型生産・販売 	<ul style="list-style-type: none"> 東京営業所を中央区横町に設置 東京工場を設立(東京都北区上十条) 製品の海外輸出を開始(台湾向けA型300台)^{※1} 	<ul style="list-style-type: none"> ホンダ月報に「三つの喜び」掲出 ドリームE型で箱根越えテスト成功 初の4ストロークエンジンドリームE型発売 ドリームE型に初の取扱説明書 	<ul style="list-style-type: none"> 東京工場を閉鎖し白子工場(埼玉工場)を設置・操業 浜松より東京(中央区横町三丁目)へ本社移転 4億5,000万円の輸入工作機械購入を決定^{※2} 名古屋・四国・大阪・九州支店設立 	<ul style="list-style-type: none"> 本社および営業所を中央区横町二丁目へ移転 本田技研労働組合結成 白子工場・大和工場を合わせ埼玉製作所とする 山下工場・野口工場を合わせ浜松製作所とする 	<ul style="list-style-type: none"> マン島TTレースに出場を宣言 浜松製作所実工場完成・操業開始 サンパワロ国際オートレースにR125で参加し完走 	<ul style="list-style-type: none"> 二輪車1年間保証制度を開始 ホンダ初のOHCエンジンを搭載したドリームSA型(250cc)・ドリームSB型(350cc)発売 	<ul style="list-style-type: none"> 社是制定^{※3} 汎用エンジンVN型発売 二輪車1年間保証サービス制度実施 	<ul style="list-style-type: none"> 埼玉製作所 白子工場内に技術研究所発足 浅間火山レースでジュニアクラス1位から5位までをホンダが独占 ホンダ初の2気筒エンジン搭載ドリームC70発売 東京証券取引所に上場 	<ul style="list-style-type: none"> 荒川高速テストコース設置 スーパーカブC100発売 汎用エンジンVNC型・VND型発売 	<ul style="list-style-type: none"> 米国ロサンゼルスに初の海外現地法人アメリカン・ホンダ・モーター(AH)設立^{※4} マン島TTレースにRC142で初出場125ccクラスでメーカーチーム賞を受賞 ベンリイCB92スーパースポーツ発売 耕うん機F150発売 スーパーカブC100米国輸出開始

1960年代

四輪市場への進出 二輪車の舞台は世界へ

好調な景気を背景に、モータリゼーションへの関心と期待が高まる日本。四輪市場への進出に向けて体制づくりを進めていた本田は、1963年ついに初の軽四輪トラックT360を発表。四輪メーカーとしてのスタートをきった。一方で二輪車は、より大きな市場での可能性を求め世界に向けた挑戦を始めていく。



1960年代の日本

景気拡大は長期にわたって継続し、実質経済成長率が年率10%前後と高い水準で推移。内需拡大と輸出増加が進むとともに、人口の増加と農村から都市への労働力移動が進み、教育水準も大きく向上した。また道路網が整備され、モータリゼーションが加速。マイカーブームが到来するなど生活が豊かになる反面、交通事故や公害など新たな社会問題が浮き彫りになった。

ホンダのトピック

「Nコロ」の愛称で親しまれたマイカーブームの火付け役

N360(1967年)

大人4人が楽に座れる室内に、最高出力はライバル車を上回る31PS、さらに31万3,000円という驚愕の低価格。かわいい姿から「Nコロ」の愛称で親しまれた。設計にあたっては「メカは小さく、人のための空間は大きく」という発想のもと室内の広さを最優先。「M・M(マン・マキシマムメカ・ミニマム)思想」として、今もホンダの四輪開発の基本となっている。



日本のモータースポーツの発展に寄与 鈴鹿サーキット(1962年)



日本にまだ高速道路すらなかった1960年。ホンダは本格的な完全舗装のレーシングコースの建設プロジェクトを開始。工期わずか1年1ヵ月を経て1962年に鈴鹿サーキットは完成した。全長6,004m、収容人員20万人、グランドスタンドも収容人員1万人。宿泊施設やレストラン、自動車遊園地などを備えた世界的にも注目されたサーキットの誕生である。

次は四輪。二輪に続き世界の覇者を目指す FITM出場宣言(1964年)



最後発メーカーとして四輪車を発売したばかりのホンダが挑んだのが、四輪車レースの最高峰F1だった。どの国内メーカーも考えなかったチャレンジをあえて決断したのである。しかし全力で挑んだ初参戦ドイツGPは惨敗という結果に。それでも困難な道をあきらめずに歩き続け、参戦2年目の最終戦メキシコGPでホンダは初優勝の快挙を成し遂げた。

片手で持てる画期的なポータブル発電機 発電機 E300(1965年)



耕うん機、船外機に続き、レジャーユースの商品がほとんどなかった発電機市場でハンディタイプの発電機E300を発売。「機械的な要素を見せず、使う人に安心感を抱かせるように」という本田宗一郎の言葉通りスイッチ類は丸いノブとし、ネジ頭部も取力表にささないよう設計。フルカバーされた家電を思わせる斬新なキュービクデザインが誕生、世界中の様々なシーンで愛用された。

世の中に巻き起こったナナハン・ブーム ドリーム CB750 FOUR(1969年)



量産二輪車として世界初の並列4気筒SOHCエンジンに、油圧式ディスクブレーキ・ダブルクレードルフレーム・4本のマフラーなど、新たなクラレンジの集大成として誕生。最高出力67PS、最高速度200km/hという他社フラッグシップモデルを凌駕する性能を發揮し、大型バイクを象徴する「ナナハン」という流行語も生むなど、それまで欧州車主導だった勢力図を完全に塗り替えた。

世の中の動き

- ・日米安保条約調印
- ・国民所得倍増計画が閣議決定
- ・石油輸出機構(OPEC)結成

- ・通産省、乗用車メーカー3グループ化構想
- ・ケネディ氏、米大統領に就任
- ・ソ連、人間衛星船の打ち上げ回収に成功

- ・通産省、230品目の貿易自由化告示(自由化率88%)
- ・日米GATT関税取決め調印

- ・ケネディ大統領、ダラスで暗殺
- ・日本、GATT 11条国(国際収支を理由とする貿易制限禁止)移行表明
- ・名神高速道路開通

- ・東京オリンピック開催
- ・東海道新幹線開業(東京-新大阪間)
- ・日本、OECD(経済協力開発機構)加盟

- ・完成乗用車の輸入自由化実施
- ・いざなぎ景気始まる
- ・自動車運転免許保有者が2,000万人突破

- ・日本の総人口が1億人を突破
- ・自動車排出ガス規制実施 CO濃度3%以下など
- ・日本、西独を抜き自動車生産世界第2位
- ・日本自動車査定協会発足

- ・ケネディラウンドを主要国間で妥結
- ・公害対策基本法公布
- ・日本、西独を抜き自動車生産世界第2位
- ・欧州共同体(EC)設立

- ・消費者保護基本法公布
- ・大気汚染防止法、騒音規制法施行
- ・アラブ石油輸出機構(OAPEC)結成
- ・自動車取得税新率(率3%)

- ・東名高速道路開通
- ・運輸省、リコール制度の制度化
- ・米、アポロ11号で初の有人月面着陸

1960

1961

1962

1963

1964

1965

1966

1967

1968

1969

主な本編掲載項目



中央区八重洲に本社新ビル完成



鈴鹿製作所稼働



(株)本田技術研究所設立^{※5}

ドリームCB72スーパースポーツ発売

スーパーカブC100の生産を埼玉製作所から鈴鹿製作所へ移管

ドイツに二輪車販売会社ヨーロッパ・ホンダ・モーター(EH)設立

鈴鹿製作所から台湾へ二輪車のノックダウン輸出開始



マン島TTレース125cc・250ccクラスで1位から5位までを独占

ロードレース世界GPの125cc・250ccクラスでメーカータイトルを獲得

(株)モータースポーツランド設立 多摩テック営業開始

スーパーカブ生産台数100万台を達成



耕うん機F60-F190発売

ベルギーにて二輪車生産販売会社ホンダ・モーター設立 初の海外生産開始

台湾の三陽工業(SY)と技術提携による二輪車の生産開始

工機製作所を白子工場内に発足

マン島TTレース125cc・250ccクラスで優勝

ロードレース世界GPの125cc・250cc・350ccクラスでメーカータイトルを獲得

三重県鈴鹿市に鈴鹿サーキット完成

第9回全日本自動車ショーでSPORTS360・SPORTS500・T360を発表



ジューノM85(水平対向2気筒・バダリーニ式トランスミッション)発売^{※7}

創立15周年

マン島TTレース250cc・350ccクラスで優勝

ロードレース世界GP 第1回日本GP50cc・250cc・350ccクラスで優勝

世界GPレース250cc・350ccクラスでメーカータイトルを獲得

マン島TTレース125cc・250ccクラスで優勝

軽トラックT360を発売(ホンダ初の四輪製品)

小型スポーツカーS500発売

汎用エンジンG20-G30発売

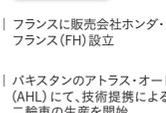
F1™への出場を宣言 F1第6戦ドイツGPにRA271で初出場

S600発売

ホンダ初の船外機GB30(4ストローク)発売

藤澤武夫、副社長に就任

「YOU MEET THE NICEST PEOPLE ON A HONDA」が米国雑誌広告賞受賞



フランスに販売会社ホンダ・フランス(FH)設立

パキスタンのアトラス・オートス(AHL)にて、技術提携による二輪車の生産を開始

タイにアジア・ホンダ・モーター(ASH)設立

狭山製作所を設立、四輪工場・工機工場稼働

オールホンダサービスファクトリー(SF)を設立

マン島TTレース125cc・250cc・350ccクラスで優勝

ホンダ初の船外機GB30(4ストローク)発売

イギリスにホンダUK(HUK)設立

タイ・ホンダ・マニュファクチュアリング(TH)設立

マン島TTレース50cc・250cc・350ccクラスで優勝

F1 メキシコGPでRA272が優勝



ドリームCB450(ホンダ二輪量産車初のDOHCエンジン)発売^{※8}



ホンダ初の携帯用発電機E300発売

(株)ホンダ菅研設立

スーパーカブ 第二世代OHCエンジン C50-C65-C70-C90発売^{※9}

S800発売

マン島TTレース 50cc・250cc・500ccクラスで優勝

世界GP 史上初の5クラス完全制覇

F1 イタリアGPに新開発3000ccエンジン(RA273)で出場

F1 イタリアGPでRA300が優勝

スーパーカブ生産累計500万台を達成

初のディーゼル耕うん機F90発売

ホンダ初の携帯用発電機E300発売



鈴鹿製作所 四輪工場稼働

タイ・ホンダ(TH)で二輪車の生産を開始

マン島TTレース250cc・350cc・500ccクラスで優勝

ロードレース世界GPから撤退を発表

F1 イタリアGPでRA300が優勝

スーパーカブ生産累計500万台を達成

N360発売

4ストローク船外機GB40発売

4ストローク船外機GB40発売

F1 フランスGPに新型空冷エンジン(RA302)で出場するがリタイア。水冷エンジン(RA301)で2位

ハンターカブCT50発売

軽四輪車Nシリーズ 国内販売届出台数で首位

ロードレース世界GPから撤退を発表

N360をイタリア・東南アジアなどに輸出

2輪車累計生産台数1,000万台達成

1968年のシーズンをもってF1レース活動を終了

ドリーム CB750 FOUR 国内発売、米国・カナダへ輸出開始

ホンダ初の小型乗用車1300発売

1970年代

創業期の想いと理念を継承、新時代に挑む

排出ガス規制やオイルショックの影響でクリーンかつ低燃費なクルマが求められた時代、本田は画期的な低公害エンジン「CVCC」の開発に成功。搭載したシビックが日米で大ヒットした。そんな中、1973年には本田宗一郎と藤澤武夫がともに退任。創業期から展開期に向かうための爽やかなバトンタッチが行われる。



1970年代の日本

1973年の第4次中東戦争により原油価格が高騰。そのほとんどを輸入に頼る日本の経済成長率は1974年に戦後はじめてのマイナスに陥った。しかしこのオイルショックがきっかけとなり省エネ・省資源化を促進。産業公害型の環境問題が減る一方、進展する都市化による大気汚染が深刻化し、自動車の排出ガス規制が本格化していくこととなる。

ホンダのトピック

世界の人々のためのベーシックカーになることを目指す

シビック(1972年)

国産小型車のほとんどがFRのセダンだった当時、シビックはトランクのないFFの2BOXとして四隅いっばいにタイヤを配置。独創的な「台形ハッチバックデザイン」により、それまでにない居住性を実現。国内外で高い評価を獲得し、その名のごとく世界の街角に溶け込んでいった。1973年には、低公害エンジンCVCCを搭載したモデルも登場。



女性ユーザーという新しい市場を開拓

ロードバル(1976年)



イタリアの併優ソフィア・ローレンが「ラッタッタ！」と声をかけながらタップ(キックペダル)を軽やかに踏むユニークなCMとともに1976年デビュー。大衆価格と自転車感覚の気軽さが受け、販売店には「ラッタッタください」と、ロードバル目当ての女性が数多く訪れた。その後いくつかの派生モデルを展開するなどファミリーバイクの先駆けとなった。

「100万台売れるエンジンを開発せよ」

ME(ミリオンセラー) エンジン・シリーズ(1977年)



無謀とも思える目標を達成すべく書き出された開発コンセプトは「丈夫で長持ち、コスト2分の1」。数々の新しい機能・機構を具現化させMEエンジンは1977年6月に発売された。5年後の1982年には、ついに年間販売台数・100万台を達成。MEエンジンは、まさにホンダの総合力を結集してつくられた、汎用にとって記念すべき商品であった。

世界市場を目指した3ドアハッチバック

アコードCVCC(1976年)



シビックからの買い換えも視野に入れ、1クラス上の快適性を求めた「ハイグレード・ハッチバックセダン」として登場。発売と同時に国内外で高い評価を獲得し、日米で「カー・オブ・ザ・イヤー」を受賞した。スタイリッシュなフォルムと広大な室内空間、さらにパワーステアリングやエアコン、パワーウインドウも採用。時代を先駆ける小型車として絶大な人気を集めた。

自動車王国に築いた生産基地

ホンダ・オブ・アメリカ・マニュファクチャリング(1978年)



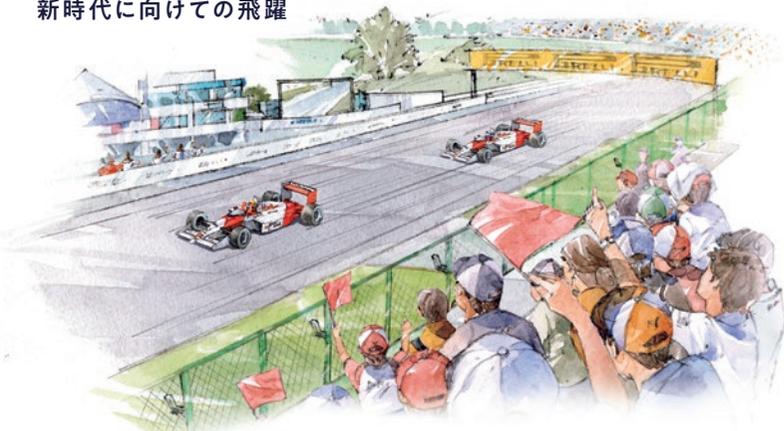
米国オハイオ州コロンパスの地に設立。現地従業員は「ワーカー」ではなく、共通の目的を達成する仲間「アソシエイト」と称され、品質は日本と全く同等であること、将来に備えて人材を育成することを目標に日本人駐在員によるサポートが行われた。二輪車生産で経験と知識を積み、その後、自動車大國アメリカで日本メーカー初の四輪車生産を成し遂げる。

世の中の動き	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979
<ul style="list-style-type: none"> 大阪万国博覧会開催 光化学スモッグ発生被害、社会問題化 米国大気浄化法改正法(通称、マスキー法)成立 	<ul style="list-style-type: none"> ニクソン米大統領、ドル防衛声明を発表(ドルショック) トル円の固定相場制が終了 自動車の資本自由化、輸入関税引き下げ実施 	<ul style="list-style-type: none"> 沖繩、本土復帰 日中国交樹立 道路法改正、初心者マーク貼付が義務化 二輪車ヘルメット着用義務化 	<ul style="list-style-type: none"> 石油ショック(第一次オイルショック) 国際通貨危機、円急騰で日本も変動相場制へ移行 第4次中東戦争起こる 	<ul style="list-style-type: none"> 戦後初のマイナス成長 運輸省、保安基準改正(前席3点式シートベルト義務付けなど) 自動車取得税、重量税を大幅引き上げ 	<ul style="list-style-type: none"> ガソリン無鉛化スタート ベトナム戦争終結 仏で第1回先進国首脳会議(サミット)開催 	<ul style="list-style-type: none"> ロッキード事件で田中角栄前首相逮捕 10モード燃費公表制度スタート 	<ul style="list-style-type: none"> 排他的経済水域200海里を設定 日本初の静止気象衛星「ひまわり」打ち上げ 米、二輪車排出ガス規制を開始 	<ul style="list-style-type: none"> 新東京国際空港(成田空港)開港 中国で改革開放政策決定(市場経済への移行) 昭和53年度排出ガス規制(日本版マスキー法)、新型車適用を開始 	<ul style="list-style-type: none"> 第二次オイルショック発生 ソニー、「ウォークマン」を発売 日米欧首脳による東京サミット開催 米中国交樹立 	
<ul style="list-style-type: none"> 主な本編掲載項目 	<ul style="list-style-type: none"> N360欠陥騒動 栃木県真岡に埼玉製作所真岡分工場開設・稼働 安全運転普及本部発足 四専務体制スタート ホンダ工機(株)設立 公害対策本部発足 アメリカン・ホンダ・モーター(AH)がYMCAに青少年支援活動の一環でミニテニールなど1万台寄贈開始 	<ul style="list-style-type: none"> ブラジルにホンダ・モトル・ド・ブラジル(HDB)設立 インドネシアにPTフェデラルモーター(HFJ)設立 ドリーム CB500FOUR発売 郵政専用車用スーパーカブMD90 発売 スーパーカブC50DX・C70DX・C90DX 発売 船外機45TWIN(水平対向2気筒エンジン)・75TWIN(直列2気筒エンジン)発売 水冷エンジン搭載の軽自動車ライフ 発売 	<ul style="list-style-type: none"> ドリーム CB350FOUR発売 ホンダ初のファミリーバイクチャリ発売 シビック(2ドア・3ドア)発売 低公害エンジンCVCCの全容を正式発表 CVCCエンジン、米国マスキー法75年規制に適合 	<ul style="list-style-type: none"> 本田宗一郎、藤澤武夫両名が退任河島喜好が新社長に就任(二代目) 本田技術研究所が二輪車開発部門を分離、朝霞研究所が発足 シビック CVCC 4ドア発売 郵政カブMD50・MD70発売^{※10} 発電機EM5000(ライフ360cc水冷エンジン活用)発売 モーターレクリエーション推進本部発足 レーシング・サービス・センター(RSC)設立 	<ul style="list-style-type: none"> 本社を中央区八重洲から原宿に移転 販売(S)・生産(E)・開発(D)のそれぞれがその機能を十分に発揮して実行するSED開発システム導入 ホンダ工機(株)をホンダエンジニアリング(株)に社名変更 (株)本田気化器研究所設立 軽乗用車部門の生産休止を表明 ドリーム CB400FOUR・CB550FOUR発売 レーシング・サービス・センター(RSC)設立 シビック RS発売 戦時下の南ベトナム(サイゴン)で二輪サービス活動を実施 	<ul style="list-style-type: none"> ブラジルに二輪車生産合弁会社、モトホンダ・ダ・アマゾン(HDA)設立 米国でCVCC方式の原理に関する総合特許が認可・公示される インドネシアのプロスペクトモーターにて技術提携によりシビック生産を開始 ドリーム CB750FOUR-II・CB550FOUR-II発売 ゴールドウイングGL1000を米国で発売 二輪SSS(セーフティ・スポーツ・ショップ)店制度発足(282店) シビックシリーズ生産累計発売以来4年で100万台を達成 ヨーロパ耐久選手権でRCBI0000がデビューレースで優勝 ふるさとの森 実行委員会発足 ローラーズルーGO GO 発売^{※11} 	<ul style="list-style-type: none"> 熊本製作所稼働開始 (株)ホンダ用品研究所設立 ブラジル(HDA)で二輪車生産を開始(CG125) イタリア・イアアップ・インダストリアル(IAI)で二輪車生産を開始 ファミリーバイク ロードバル発売 シビックシリーズ生産累計発売以来4年で100万台を達成 アコードCVCC発売 ヨーロパ耐久選手権でRCBI0000がデビューレースで優勝 ふるさとの森 実行委員会発足 ローラーズルーGO GO 発売^{※11} 	<ul style="list-style-type: none"> インドネシアに二輪車・汎用品生産の合弁会社イモラ・ホンダ(HH)設立 初めて連結決算を発表 WGPロードレース世界選手権TT-FI レース参戦を再開、F1クラスで優勝 ブラジル(ホンダマチックトランスミッション搭載)発売 汎用MEエンジンG200・G150発売 船外機75・100発売 第1回NHサークル全社大会開催 	<ul style="list-style-type: none"> 米国に二輪車生産会社、ホンダ・オブ・アメリカ・マニュファクチャリング(HAM)設立 アルゼンチンにホンダ・モトル・デ・アルゼンティナ・エス・エー(HAR)設立 ナイジェリアに、二輪・汎用品販売の現地法人ホンダ・マニュファクチャリングナイジェリア(HMN)を設立 二輪ウイング店制度導入 プレリウド(初代)発売 ベルノ店制度発足 「ふるさとの森づくり」各事業所で推進 ホークCB400T(ホンダマチック装備車)発売 ホンダ初の芝刈機HR21発売 シビックを7年ぶりにモデルチェンジ 携帯型発電機 デンタEX400発売 英国ブリティッシュ・レイランド(BL)と、トライアンフ・アクレイム(バラード)のライセン生産技術供与について調印 世界初ステンレス魔法瓶アクト・ステンレスポット発売^{※12} 鈴鹿サーキット交通教育センター新装開設 	<ul style="list-style-type: none"> 総合テストコース栃木ブルーピンググラウンド(PG-T)完成 汎用品研究開発朝霞東研究所発足 ナイジェリアに、二輪・汎用品販売の現地法人ホンダ・マニュファクチャリングナイジェリア(HMN)を設立 二輪ウイング店制度導入 プレリウド(初代)発売 ベルノ店制度発足 「ふるさとの森づくり」各事業所で推進 ホークCB400T(ホンダマチック装備車)発売 ホンダ初の芝刈機HR21発売 シビックを7年ぶりにモデルチェンジ 携帯型発電機 デンタEX400発売 英国ブリティッシュ・レイランド(BL)と、トライアンフ・アクレイム(バラード)のライセン生産技術供与について調印 世界初ステンレス魔法瓶アクト・ステンレスポット発売^{※12} 鈴鹿サーキット交通教育センター新装開設

1980年代

世界企業への成長 新時代に向けての飛躍

シティのヒットを筆頭に四輪車の主要商品がベストセラー化。海外においては現地生産体制の拡充が加速する。二輪車ではファミリーバイク市場の激しいシェア争いが続いた。またこの時代は、世界企業に向けて飛躍するための仕込みも行われ、世界各国をネットワークで繋ぐ特資補完体制の構築が進められていく。



1980年代の日本

オイルショックの影響で不況が続く中、日本の輸出産業競争力は格段に向上。自動車においては日本からの輸出超過が日米貿易摩擦として問題化した。1985年のG5におけるプラザ合意以降、円高は急激に加速。日銀の超低金利政策によって資産が株式市場に流れ込み、1989年には日経平均株価が史上最高値に達するなど、いわゆるバブル景気へと発展した。

ホンダのトピック

バブル期の日本で空前のブーム。社会現象を巻き起こす

「レースはホンダの企業文化です。勝ち負けではなく、ホンダ車に乗っていただいているお客さまに、最高の技術をお見せするため、そして楽しんでいただくため、レース活動を再開します。」という河島喜好の言葉通り、他の追随を許さぬマクラレン・ホンダの活躍に日本中が沸いた。1988年の全16戦15勝、1991年の4年連続ダブルタイトル獲得といった金字塔を打ち立てる。



マクラレン・ホンダ MP4/4

その後のベンチマークとなったザ・スクーター

タクト (1980年)



市場でのシェア競争が激化する中、登場したタクト。折よく女性の社会進出が急進した時代に重なり、ファミリーバイクとして女性を中心に爆発的にヒットした。1986年の原動機付自転車ヘルメットの着用義務化を受け、1987年、「メットイン」スペースをシート下に備えるタクトフルマークを発売。スクーター構造に革命を起こし、他社を含めて必須の構造になっていく。

欧州を始め、日本でも新市場を掘り起こした

ミニティラーこまめ F200 (1980年)



農業の先細り感が進む反面、家庭菜園などへのニーズが膨らむといった傾向が見え始めていた世の中で、「アマチュア・ホビーカーデン用の入門機」というコンセプトをもとに開発。大型耕うん機にはないかわいらしいコンパクトな見た目と、それに合わせた高い性能を受け、ピーク時には国内のみで年間5万台が売れるという、ベストセラー商品へと成長した。

個性的なスタイルとTVCMで日本を沸かせる

シティ (1981年)



「シティは、ニュースにあふれてる」というキャッチフレーズで登場。TVCMでは英国バンドのマッドネスが踊る奇妙なムカデダンスが話題を呼び、多くのマスコミに取り上げられた。限られたスペースで広い居住空間を確保するトールボーイ・デザインや、トランクに搭載できるバイク「モトコンボ」の同時発売など、画期的な提案で大ヒットを果たす。

リッター100馬力に挑戦した夢のエンジン

VTEC (1988年)



次世代のエンジン技術は何か。ホンダが自らに課したその命題に答えるべく、さまざまな困難を乗り越え、吸・排気バルブのタイミングとリフトを同時に切り替える画期的な「VTECエンジン」が誕生。1989年、フルモデルチェンジしたインテグラに初めて搭載されたこのエンジンは、市販四輪車用エンジン世界初の「リッター当たり100馬力」を実現したことで世界からの注目を集めた。

世の中の動き	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989
ダイエー、小売業で日本初の売上1兆円 ・日米五輪委、モスクワ五輪不参加を決定 ・自動車部品輸入関税の原則撤廃	対米乗用車輸出を年間168万台とする自主規制開始 ・自動車生産台数2年連続世界1位 二輪車生産741万台で史上最高	・東北上越新幹線開業 ・中央自動車道全線開通 ・フィリップス、世界初のCD (ソニーとの共同開発) を生産開始	・東京ディズニーランド®が開園 ・任天堂、「ファミリーコンピュータ」を発売 ・無鉛ハイオクガソリン発売	・グリコ・森永事件 ・物品税、自動車税、軽自動車税引き上げ ・自動車運転免許保有者が5,000万人突破	・5カ国蔵相中央銀行総裁会議 (G5) トル高是正の市場協調介入を合意 (プラザ合意) ・日本電信電話会社 (NTT)、日本たばこ産業会社 (JT) 発足 ・軽自動車保有、1,000万台突破	・男女雇用機会均等法施行 ・原動機付自転車一種、ヘルメット着用義務化 ・自動車保有台数 5,000万台突破	・国鉄が分割・民営化 ・NTT、初の携帯電話サービスを開始 ・米ニューヨーク株式市場で大暴落 (ブラックマンデー)	・日本の屋内球場「東京ドーム」完成 ・総合デジタル通信網 (ISDN) サービスを開始 ・フロン規制法施行	・昭和天皇崩御、明仁皇太子ご即位「平成」に改元 ・初の消費税3%導入 (物品税廃止) ・ベルリンの壁崩壊	
主な本編掲載項目	売上高(単独)1兆694億4,000万円を達成。1兆円企業の仲間入りを果たす ヤマハとの出荷競争始まる ザ・スクーター タクトを発売 ゴールドウィングGL1100発売 ロードレース世界耐久選手権でRS1000が初代ワールドチャンピオンに輝く シビック4ドアセダン発売 小型耕うん機ミニティラーこまめF200発売 家庭用小型除雪機スノーラ HS35を発売	障害者雇用促進法に基づく特例子会社ホンダ太陽(株)を設立 (特例子会社認定は1982年) ブラジルのHDAでアルコール燃料のオートバイ量産を開始 BL、トライアンフ・アクレ임 (バード) を英国で発売 ナイジェリア (HMN) で二輪車の生産を開始 シティとシティ搭載用トランクバイクモトコンボを同時発売 ¹³ NR500全日本選手権 鈴鹿200kmレースで木山賢悟が優勝 リッター当たり105kmを実現 新型スーパーカブ50を発売 ¹⁴ シビックが40マイル・ガロンを突破 ガソリン車で初の記録 ホンダエレクトロジャイロゲータを発表 (世界初の地図型カーナビゲーションシステム)	米国 (HAM) 四輪車工場で量産第一号車アコード4ドアセダンラインオフ 中国 嘉陵機器廠との技術提携による二輪車の生産開始 ホンダ太陽を本田技研の特例子会社に認定 タイに四輪車販売合弁会社、ホンダ・カーズ・タイランド (HCT) 設立 WGP500 NS500 (フレディー・スベンサー) シリーズとメーカータイトル獲得 F1世界選手権へ再び参戦 二輪レース部門を統合し (株)ホンダ・レーシング (HRC) 設立 リッター当たり150kmを実現 新型ホンダスーパーカブ50 SDXを発売	河島社長退任、久米新社長就任 (三代目) ヤマハとの出荷競争終結 タイに汎用生産会社、ホンダパワーアクティブメント・マニュファクチャリング (HPE) を設立 BLと (ローバー-800/レジェンド) 共同開発契約調印 WGP500 NS500 (フレディー・スベンサー) シリーズとメーカータイトル獲得 F1世界選手権へ再び参戦 XLV750R発売 リッター当たり180kmを実現 スーパーカブ50スーパーカブ50発売 汎用エンジン (ZEエンジン シリーズ) GX110・GX140発売 3代目シビック、2代目バードシリーズ発売 バードスポーツCR-X発売 ゴールドウィングGL1200発売	ホンダ店をクリオ店・プリモ店に系列化 (プリモ店は1985年) 二輪車専門店制度「セレクト店、新ウイング店、新SSSS」導入 アメリカ・ロサンゼルスに本田技術研究所 (HRA) 設立 ¹⁵ インドに二輪車生産合弁会社 ヒーロー・ホンダ・モーターズ (HHML) を設立 インドに二輪車 (スクーター) 生産販売合弁会社、カインティック・ホンダ・モーター (KHM) 設立 タイのパンチャン・ゼネラル・アッセンブリー (BGAC) にて、四輪車の委託生産を開始 ホンダ・オブ・カナダ・マニュファクチャリング (HCM) 設立 NSR500 (V型4気筒) デビュー3勝 (初期型) F1 ウィリアムズ・ホンダ 第9戦ダラスGPにて復帰後初優勝 シビック・バードシリーズに新設計DOHC-16バルブエンジン搭載車を追加し発売 軽二輪スクーター スペイシー250フリーウェイを発売	新本社ビル 港区青山に完成・移転 国内四輪販売体制がPCV (プリモ・クリオ・ベルノ) 3系列化 英国にホンダ・オブ・ザ・UK マニュファクチャリング (HUM) 設立 インドに汎用生産合弁会社、シュラム・ホンダ (SHPL) 設立 メキシコに四輪車生産会社 ホンダ・デ・メヒコ (HDM) 設立 WGP史上初 フレディー・スベンサーが500ccと250ccダブルタイトル獲得 乗用管理機 マイティII 発売	H-A-R-T (Honda Active Riders Terminal) 発足 基礎技術研究センターを設立 ¹⁶ 米国でACURAチャンネル展開スタート タイに二輪車の販売合弁会社 A.P.ホンダ (APH) 設立 フランスに汎用製品生産会社、ホンダ・フランス・インダストリアル (HFI) 設立 インドに汎用生産合弁会社、シュラム・ホンダ (SHPL) 設立 メキシコに四輪車生産会社 ホンダ・デ・メヒコ (HDM) 設立 WGP史上初 フレディー・スベンサーが500ccと250ccダブルタイトル獲得 新感覚軽250ccスクーターフュージョン発売 小型ジェットエンジンおよびジェット機の研究を開始 ヒューマノイド・ロボットの研究開発を開始	北米事業統括会社ホンダ・ノース・アメリカ (HNA) 設立 オースチン・ローバーと共同生産・エンジンの供給契約書に調印 WGP500 新型NSR500投入 フィン・ガードナーがライダータイトル、メーカータイトル獲得 F1 ウィリアムズ・ホンダがコンストラクターズタイトル、ネルソン・ピケ選手がドライバーズタイトルを獲得 鈴鹿サーキットでF1日本GPを初開催 WGP500 バリ・ダカールラリーにデビュー優勝 (1989年まで4連勝) F1 ウィリアムズ・ホンダがコンストラクターズタイトルを獲得 新設計の水冷・4サイクル・V型4気筒エンジンを搭載 VFR750F発売 新感覚軽250ccスクーターフュージョン発売 4代目シビックと2代目CR-Xを発売 日本初のSRSエアバッグを搭載したレジェンドを発売 超小型世界最軽量ポータブル発電機EX300を発売	本田技術研究所のドイツ駐在員事務所HREを現地法人化 (HRE-G) 熊本製作所のふるさとの森づくりが内閣総理大臣賞受賞 F1 マクラレン・ホンダがコンストラクターズタイトル、アイルトン・セナ選手を獲得 水平対向6気筒エンジン搭載新型ゴールドウィングGL1500発売 アフリカツイン (650cc) 発売 ¹⁷ タイのTHからカブ100EXを輸入・発売 F1 マクラレン・ホンダがコンストラクターズタイトル、アラン・プロスト選手がドライバーズタイトルを獲得 VTECエンジン搭載シビック・3ドアとCR-X、インテグラを発売	プリモ・クリオ・ベルノ (PCV) 専売体制スタート 米国モデル別乗用車販売台数でアコードがベストセラーカーに選定 イギリスに欧州本社、ホンダ・モーター・ヨーロッパ (HME) 設立 ナイジェリア (HMN) CG125NRをブラジルよりKD輸入し初の組立製品 WGP500 エディー・ローソンがシリーズタイトルを獲得 F1 マクラレン・ホンダがコンストラクターズタイトル、アラン・プロスト選手がドライバーズタイトルを獲得 VTECエンジン搭載シビック・3ドアとCR-X、インテグラを発売

1990年代

改革と市場への挑戦で 危機を乗り越える

バブル崩壊。市場ニーズの変化をつかみきれず、これまでにない経営危機に直面した本田は、全社的なTQM(総合的品質管理)を導入し、四輪国内販売台数80万台を目指す「80万台体制計画」を断行。販売不振を巻き返したクリエイティブ・ムーバー(生活創造車)は、その後の四輪事業を支える大きな転換点となった。



1990年代の日本

公定歩合の引き上げや1991年の地価税法の施行により地価・株価が急落したことでバブル経済が崩壊。長引く不況により、銀行や証券会社までもが倒産する金融破綻が起きた。一方、産業の新しい変化としてはインターネット関連の投資が過熱、ITバブルへと発展していく。環境問題では1997年に京都議定書が採択され、日本は1990年比6%の温室効果ガス削減を約束した。

ホンダのトピック

新発想のクルマづくりを目指した「クリエイティブムーバー」第一弾 オデッセイ(1994年)

「新価値創造」を模索した90年代。本田は人々の暮らしを豊かにするためにクルマの在り方から追求。クリエイティブムーバー第一弾となる「オデッセイ」はセダンから乗り換えるミニバンとしてヒットした。その後も「クルマは、使う人が自らの生活を思いのままに創造・演出するための道具であり、そこの主人公はあくまでも人」としてシリーズは拡大していった。



夢と技術が込められた新世代スポーツカー NSX(1990年)



高度な運転技術が必要とされるスポーツカーが多い中、誰でも運転しやすく高性能な「人間中心」の新世代スポーツカーとして登場。「走る・曲がる・止まる」を極めるため、駆動方式はF1マシン同様ミッドシップエンジン・リアドライブとした。また量産車として世界初のオールアルミボディを採用。動力性能と運転のしやすさを高次元で両立する。

デザインとカラーで新しいホンダ船外機を開発 船外機 BF35A・BF45A(1992年)



「水の上を走るもの水を汚すべからず」の信念のもと、4ストローク船外機にこだわり続けて約20年。ようやく環境問題として社会から2ストロークを疑問視する声が上がりはじめた。そんな折にホンダは新しい船外機を開発。それまで常識であった直線的で四角い船外機とは異なり、シルバーで美しく仕上げられたBF45A・BF35Aは、船外機においてもホンダブランドを際立たせた。

新しい時代にふさわしいロードスポーツ CB1000 SUPER FOUR(1992年)



「新しい時代にふさわしいホンダのネイキッドロードスポーツはどうあるべきか」を追求したプロジェクトBIG-1から誕生。走る者の心を魅了する感動性能を求めたCB1000 SUPER FOURは、大型二輪免許が限定解除と呼ばれ、取得が困難だった時代にも関わらずヒットを記録。その後も着実に成熟・進化を続け、2022年には30周年モデルが登場した。

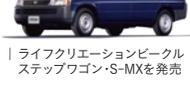
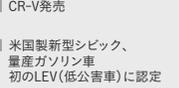
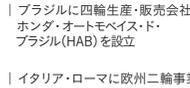
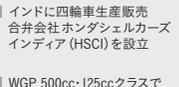
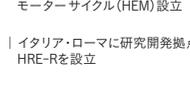
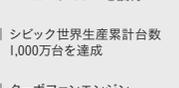
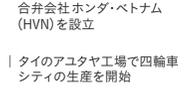
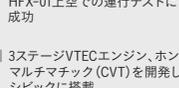
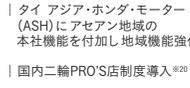
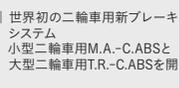
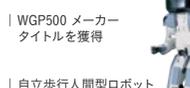
人と自然の未来を育むモビリティワールド ツインリンクもてぎ(1997年)



自然の中でレクリエーションやモータースポーツの楽しさを体験し、安全運転の学習や科学的知識・技術の習得ができる「場」と「機会」を提供することで生活文化の向上に寄りたいと考え、1997年8月オープン。開場25周年を迎えた2022年には、人と自然とモビリティのさらなる共生を願い、施設名称をモビリティリゾートもてぎへと変更した。

世の中の動き	・日銀、公定歩合を6%引き上げ ・軽自動車、規格改定(全長・排気量660cc拡大)施行 ・東西ドイツ統一、ドイツ連邦共和国誕生	・バブル景気崩壊 ・牛肉・オレンジの輸入自由化スタート ・リサイクル法が施行 ・オートマチック車限定運転免許制度発足	・公示地価17年ぶりに下落 ・対米乗用車輸出規制枠165万台 ・対EC自動車輸出枠126万台で合意	・ガソリン乗用自動車の燃費基準改正(2000年度目標) ・通産省、対米乗用車輸出自主規制の撤廃を発表 ・米国が自動車生産で14年ぶりに世界一に	・日米包括協定、自動車、部品分野を除く3分野で合意 ・通産省、対米乗用車輸出自主規制の撤廃を発表 ・環境基本法制定	・阪神淡路大震災発生 ・製造物責任法(PL法)施行 ・自動車保有台数、7,000万台突破	・初の小選挙区比例代表並立制による総選挙実施 ・大型二輪免許、普通二輪免許新設 ・道路交通情報通信システム(VICS)供給開始	・消費税5%に引き上げ ・環境影響評価(環境アセスメント)法成立 ・京都で地球温暖化防止会議を開催 ・運輸省、自動二輪車排出ガス規制を公布	・地球温暖化対策推進法が成立 ・ナンバプレート希望番号制スタート	・欧州連合(EU)の単一通貨ユーロが誕生 ・日産自動車、ルノーとの資本提携に合意
--------	---	---	---	---	---	--	---	--	-------------------------------------	---

1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

<p>主な本編掲載項目</p> <ul style="list-style-type: none"> 久米社長退任、川本新社長就任(四代目) AH本社 ロサンゼルスからデネバーに移動 ローバー・グループとの資本提携契約に調印 フィリピンに四輪車生産合弁会社ホンダ・カース・フィリピンズ(HCPI)設立 NSX発売 FI マクラレン・ホンダがコンストラクターズタイトル、アイルトン・セナ選手がドライバーズタイトルを獲得 アフリカツイン750発売 デジタルマップ・ナビ発表(2代目ジェント搭載) 日本初の助手席用ホンダSRSエアバッグシステムをレジェンドに搭載 	<ul style="list-style-type: none"> 本田宗一郎最高顧問逝去 二輪事業本部および汎用事業本部設立 FI 日本GPでマクラレン・ホンダがコンストラクターズタイトル、アイルトン・セナがドライバーズタイトルを獲得 HFT搭載モトクロスRC250MAが全日本モトクロス選手権出シリーズタイトルを獲得 シビック フェリオを発売 VTEC-Eエンジンを発表 	<ul style="list-style-type: none"> 英国のHUMで四輪車工場が稼働アコードの生産を開始 タイに四輪車生産合弁会社、ホンダ・カース・マニファクチュアリング(タイランド)(HCMT)を設立 中国 五羊-本田摩托(広州)有限公司設立および天津本田摩托有限公司設立 パキスタンに四輪車生産販売合弁会社ホンダ・アトラス・カース・パキスタン(HACPL)を設立 WGP 日本GPで125cc・250cc・500cc全クラス優勝 FIレース活動、1992年シーズンでの休止を発表 CB400 SUPER FOUR CB1000 SUPER FOURを発売 CBR900RRファイアーブレード(SC28)新発売 市販車世界初の横柄ピストン・エンジンを搭載したNRを発売 スーパーカブ生産累計2,000万台を達成(二輪車で世界最多) 流圈・シルバー色の新デザイン船外機 BF35A・BF45Aを発売 	<ul style="list-style-type: none"> いすゞ自動車と商品相互補完で基本契約締結^{※18} 中国 嘉陵-本田発動機有限公司設立 ホンダ・モーター・チャイナ(HMC)を香港に設立 浜松製作所汎用機工場ISO9001認証を取得(ホンダ国内工場初) 鈴鹿サーキットにホンダコレクションホール開館 主翼上面エンジン配置のMH-02(実験機)の初飛行に成功^{※19} CBR900RRファイアーブレード(SC28) アラブ首長国連邦(UAE)に中近東事務所(HAMER)設立 	<ul style="list-style-type: none"> 日本本部設立(4地域本部制)四極自立化 汎用事業本部をHGHへ集約(SD一体化) ホンダ初のミニバンオデッセイ発売 ホンダ製モーターサイクルCG125がブラジルの記念切手に採用 ローバーグループとの資本提携解消に合意 中国 小型発電機生産・販売の合弁会社福建東本発電機組有限公司設立 中国 東風本田汽車零部件有限公司(OHAC)設立 電気スクーター ホンダCUV ESを官公庁向けにリース限定発売 WGP500 ミック・ドゥーハンシリーズタイトルとメーカータイトル獲得 スーパースポーツバイクRVF/RC45(750cc)を発売 	<ul style="list-style-type: none"> 国内四輪販売80万台体制計画 CR-V発売 米国製新型シビック、量産ガソリン車初のLEV(低公害車)に認定 インドに四輪車生産販売合弁会社ホンダシエルカース・インド(HSCI)を設立 WGP 500cc・125ccクラスでメーカータイトルを獲得 シビック世界生産累計台数1,000万台を達成 ターボファンエンジン HFX-01上空での運行テストに成功 3ステージVTECエンジン、ホンダマルチマチック(CVT)を開発しシビックに搭載 世界初の二輪車用新ブレーキシステム 小型二輪車用M.A.-C.ABSと大型二輪車用T.R.-C.ABSを開発 	<ul style="list-style-type: none"> ライフクリエイションビークルステップワゴン・S-MXを発売 ブラジルに四輪生産・販売会社ホンダ・オートモビーズ・ド・ブラジル(HAB)を設立 イタリア・ローマに欧州二輪事業の新しいホンダ・ヨーロッパ・モーターサイクル(HEM)設立 イタリア・ローマに研究開発拠点HRE-Rを設立 ベトナムに二輪車生産販売合弁会社ホンダ・ベトナム(HVN)を設立 タイのアユタヤ工場で四輪車シティの生産を開始 タイ アジア・ホンダ・モーター(ASH)にアセアン地域の本社機能を付加し地域機能強化 国内二輪PRO'S店制度導入^{※20} WGP500 メーカータイトルを獲得 自立歩行人間型ロボットプロトタイプP2を発表 	<ul style="list-style-type: none"> 二輪車世界生産累計1億台達成 電気自動車Honda EV Plusを日本・米国でリース販売開始 タイに二輪研究所(HRS)を設立 WGP500 NSR500 15戦全勝 ツインリンクもてぎがオープン スーパーカブに小径ホイールを採用したコンパクトなリトルカブを発売 世界初360°自在傾斜超小型軽量4ストローク汎用エンジンGX22-GX31を発売 ハイブリッド・システムホンダ・インテグレートッド・モーターアシスト(IMA)発表 	<ul style="list-style-type: none"> 川本社長退任、吉野新社長就任(五代目) インドに二輪・汎用のR&D事務所ホンダR&Dインディア(HRID)を開設 中国 広州本田汽車有限公司(GHAC)設立 および 東風本田発動機有限公司(DHEC)設立 WGP500 ホンダ22連勝達成 インドに二輪生産・販売拠点ホンダ・モーターサイクル・アンド・スクーター・インディア(HMSI)設立 中国 広州本田汽車有限公司(GHAC)アコードを生産開始 WGP500 アレックス・クリビエリ デビューライダー・メーカータイトル獲得 CB1300 SUPER FOURを発売 VFR(800cc)を発売 ブラジル現地生産専用モデルC100 BIZ発売(カブ系で初めてメットインBOXを採用) 新世代4ストロークスクーターホンダ ジョルノ クレア発売^{※21} 小型、軽量の正弦波インバーター搭載新世代発電機EU9iを発表 	             
--	--	--	---	--	---	--	--	---	---

2010年代

異次元への挑戦 社会と紡ぐ新たな夢

世界同時不況が続く中、ホンダは世界各地の自立的経営を推進する「世界六極体制」を構築。各地域のニーズに合った商品づくりを目指した。また、その戦略は2030年ビジョンの実現に向けて発展的に進化し、「ものづくりセンター」の開設など、さらなる成長を遂げるための大胆な事業運営体制改革につながっていた。



2010年代の日本

2011年3月11日、各地に未曾有の被害をもたらした東日本大震災が発生。日本経済は先が見えない低成長時代へと突入した。閉塞感が漂う中、政府による日本再興戦略がとられ、金融政策・財政政策・民間投資を通じた経済復興策を講じたが内需の拡大には至らなかった。一方、世界では環境対策の動きが加速。パリ協定では途上国を含む地球規模での環境保全が確認された。

ホンダのトピック

画期的な発想で、日本の「のりもの」を変えていく

軽自動車の規格サイズを最大限活用し、これまでにないユーティリティを実現。ホンダのM・M(マン・マキシマム メカ・ミニマム)思想による革新のプラットフォームを完成させた。広さを生かして使いやすさを突きつめ、日常から趣味、さらには介護まで、日本で暮らすあらゆる人のライフスタイルに寄り添う新しい「のりもの」を目指した。



N-BOX(2011年)

世界基準となるスクーターの価値を追求

PCX(2010年)



世界各地にはそれぞれの道路事情があり、乗る人の好みも異なる。しかし本質を徹底して追求すれば、きっと誰もが喜ぶスクーターがつけられるはずだ。PCXはそんな想いで開発された。ラグジュアリーなデザイン、ゆったりしたライディングポジション、安定して走れる14インチの大径タイヤなど、突きつめたのは「世界の様々な街を走る、ひとつのデザイン」だった。

暮らしに馴染み、愛着の持てる芝刈機

Miimo HRM520(2013年)



欧州を中心とするロボット芝刈機への需要拡大を背景に、安心して任せられる・簡単に使える・快適に過ごせるといった3つをコンセプトとするロボット芝刈機を開発。曜日・時間・エリアを設定すれば自動で芝刈りが行える機能性とお客様の日々の暮らしに溶け込む「優しさ」と親和性を感じたデザインで、ホンダらしい芝刈機のカたちを生み出した。

常識破りの発想を空の上でも体現する

HondaJet(2014年)



1986年、平均年齢26歳のチームでスタートした航空機の研究は、30年近くを経た2014年、量産1号機の初飛行の成功へとつながった。エンジンを主翼上側に配置する斬新なレイアウト、居住性・静寂性・航続性能・燃費性能を同時に叶える常識破りの発想は「誰かにまねられても、人まねはしない」というホンダらしさを空の上でも体現する。

愛され続けて60周年

スーパーカブシリーズ世界生産累計1億台(2017年)



20世紀から21世紀へと続く驚異的なロングスラーモデル。スーパーカブシリーズが、世界生産累計1億台を達成。1958年の初代モデルから59年間を経て達成したこの驚異的な記録は、単一シリーズの原動機付モビリティ生産台数の世界最高記録である。あわせて2018年に60周年を迎えたことから、華やかなゴールドカラーを施した1億台・60周年記念車も制作された。

世の中の動き	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
<ul style="list-style-type: none"> 日本航空、会社更生法適用申請 東北新幹線全線開業 南米チリでM8.8の地震発生 	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災、M9.0の地震発生 タイで大雨による洪水被害拡大 新「エコカー補助金」スタート 	<ul style="list-style-type: none"> 再生可能エネルギー固定買取制度開始 東京スカイツリー®完成、開業 	<ul style="list-style-type: none"> 日銀、デフレ脱却に向け「異次元の金融緩和」 IPS細胞(人工多能性幹細胞)世界初の臨床研究へ 福岡市で初のPM2.5警戒予報 	<ul style="list-style-type: none"> 消費税17年ぶりに増税、5%から8%へ タカタ製エアバッグリコール問題を巡り米上院議会で公聴会開催 	<ul style="list-style-type: none"> 改正電気事業法成立、電力販売全面自由化 タカタ社、米運輸省国家道路交通安全局(NHTSA)のエアバッグ問題制裁金同意命令に合意 地球温暖化対策の国際的枠組み「パリ協定」採択 	<ul style="list-style-type: none"> 熊本地震発生、M7.3の地震発生 改正公職選挙法施行、選挙権年齢を18歳以上に引き下げ 日銀、初のマイナス金利導入を決定 	<ul style="list-style-type: none"> 国土交通省、改正保安基準公布、シートベルトリマインダーの対象を全席に拡大(2020年9月より新型車搭載義務化) 英政府、EU離脱を正式通知 	<ul style="list-style-type: none"> 西日本豪雨被害、広範囲に河川氾濫や土砂崩れ発生 国土交通省、自動運転システム整備に認証制度導入 環太平洋パートナーシップ協定(TPP)発効 	<ul style="list-style-type: none"> 天皇陛下即位、元号を「令和」に改元 消費税、8%から10%に引き上げ 国土交通省、衝突被害軽減ブレーキ67車種を初認定 	
主な本編掲載項目	<ul style="list-style-type: none"> 電動二輪車EV-neo100販売開始 インド ヒーロー・ホンダ合弁解消および今後の技術供与について調印 二輪R&Dセンター熊本分室(HGA-K)を熊本製作所内に設立 新開発の空冷エンジンを搭載したCB1100シリーズを発売 世界初二輪車用デュアル・クラッチ・トランスミッション(DCT)を搭載するVFR1200Fを発売 125cc原付二種スクーターPCX日本で発売 新型オートマチックトランスミッションCVマチック搭載のカブタイプWavel10i ATをタイで発表 カセットガス燃料を使用するガスパワー発電機エネボEU9iGBを発売 HondaJet 量産型試験初号機が初飛行 フィット ハイブリッドを発売 	<ul style="list-style-type: none"> タイ四輪アユタヤ工場(HATC)が大規模な洪水被害で浸水 ナイジェリアで低価格戦略小型二輪車Ace CB125発売 MotoGP RC212V ケーシー・ストーナー ライダー・コンストラクター・チームタイトル3冠達成 ソニンリンクもてぎでINDY® JAPAN THE FINALを開催 日本開催の歴史に幕を閉じる 新型4ストローク船外機BF250をジェンバ国際ボートショーで発表 軽自動車N-BOX発売 新型4ストローク船外機BF250をジェンバ国際ボートショーで発表 軽自動車N-ONEを発売 	<ul style="list-style-type: none"> 二輪開発プロセスの進化に伴う熊本生産二輪車・大型FUN機種DEB協働体制強化 1958年発売以来初のフレーム構造を刷新したスーパーカブ50・110を発売(中国の新大洲本田生産) 汎用事業本部名称を汎用パワープロダクツ事業本部に変更 浸水被害のHATCが復旧開始から4か月で生産を再開 MotoGP RC213V(1000cc・V4)デビュー チーム・メーカーの2冠獲得 タイの二輪車工場でグローバルモデル専用新工場の本格稼働 CB500シリーズの生産開始 ニューミッドコンセプトシリーズNC700X・NC700S・インテグラを発売 第二世代のデュアル・クラッチ・トランスミッションを初搭載 PCX150を発売 四輪車用スポーツハイブリッドシステムSH-AWD・i-DCD・i-MMD発表※25 軽乗用車N-WGNを発売 	<ul style="list-style-type: none"> 埼玉製作所 寄居完成工場稼働 ブラジルに風力発電事業会社ホンダ・エネジー・ド・ブラジル・リミタード(HEN)を設立 ケニアに新二輪事業会社ホンダ・モーターサイクル・ケニア(HMK)設立 ナイジェリア 四輪現地法人ホンダ・オートモービル・ウエスタンアフリカ(HAWA)設立 MotoGP マルク・マルケス史上最年少タイトル獲得(ライダー・チーム・コンストラクター)の3冠獲得 自動運転芝刈機Miimoを欧州で発売 3代目フィット・フィットハイブリッド(i-DCD)発売 ヴェゼル発売 アコード ハイブリッド・アコード プラグインハイブリッドを発売 軽乗用車N-WGNを発売 	<ul style="list-style-type: none"> 日本本部設立 二輪車世界生産累計3億台達成 フィット・ヴェゼル i-DCDのDCTユニット制御におけるリコール発生 欧州専用開発シビック・ツアラール発売 MotoGP マルク・マルケス2年連続3冠(ライダー・チーム・コンストラクター)獲得 ホンダ太陽 日出工場データビジネス稼働工 二輪NCシリーズを750ccに排気量アップし発売 スクーターPCXとPCX150をフルモデルチェンジし発売 スーパーカブの形状が日本で立体高際登録認可 乗り物として初の快挙達成※27 HondaJet 量産1号機が初飛行に成功 	<ul style="list-style-type: none"> 伊東社長退任、八郷新社長就任(八代目) FI 世界選手権にマクラレン・ホンダとして参戦 欧州専用開発シビック・ツアラール発売 MotoGP 参戦マシンを一般公道走行可能にしたRC213V-Sを欧州・米国・豪州・日本で発売予定、商談開始 シビックTYPE Rを発売 HondaJet 米国連邦航空局から事前型式証明を取得 米国でのデリバリー開始 	<ul style="list-style-type: none"> タイで四輪車プラチンプリ工場の稼働開始※28 新型燃料電池自動車クラリティ FUEL CELLを発売 MotoGP マルク・マルケスライダー・コンストラクターズタイトルを獲得 CRF1000L アフリカツインを発売 オデッセイ ハイブリッド発売 NSXを発売 小型耕うん機こまめ F220を15年ぶりにモデルチェンジし発売 	<ul style="list-style-type: none"> (株)ホンダパワープロダクツジャパン(HPJ)発足 GMとホンダが、業界初となる燃料電池システムを生産する合弁会社を設立 ナイジェリアでビジネスユースに適した新型小型二輪車Ace110を発売 MotoGP マルク・マルケス2年連続タイトルを獲得、コンストラクターズ・チーム3冠達成 FI マクラレンとのパートナーシップを解消しスクーリアトロ・ロソッリに2018年シーズンからFIパワーユニットを供給決定 CBR1000RRファイアースペード(SC77)をフルモデルチェンジし発売 スーパーカブシリーズ60周年・世界生産累計1億台達成、スーパーカブシリーズをフルモデルチェンジし発売 ハンディタイプ蓄電機LIB-AID E500を発売 HondaJet 2017年通年でカテゴリ別最多デリバリーを達成 シビック・2代目N-BOXを発売 	<ul style="list-style-type: none"> 国内二輪販売チャンネルをHonda Dream・Honda Commuterの2チャンネル体制化※29 プラグインハイブリッドモデルクラリティPHEVを発売 MotoGP マルク・マルケス3年連続5回目タイトル獲得・3年連続3冠達成 レッドブル・レーシングへの2019年シーズンからのFIパワーユニット供給に合意 新世代CBシリーズCB1000R発売 FI レッドブル・レーシングマックス・フェルスタッペンオーストリアGPで2015年復帰後初勝利 CRF1100L アフリカツイン排気量1100ccにアップしフルモデルチェンジ ビジネス用電動二輪車ベンリ e:シリーズを発売 二輪市場活性化プロジェクトHondaGO実施 HondaJetが2年連続でカテゴリトップのデリバリー数を達成 	

2020年代

生活の可能性が広がる喜びを、すべての人に提供する

2020年代前半の日本

2020年、新型コロナウイルス感染症の影響により全国で緊急事態宣言が発出され社会経済活動が落ち込み、また日々の生活環境や習慣も大きく変化し、社会環境は大きな転換期を迎えた。価値感の多様化、高齢化の進展、都市化の加速、気候変動の深刻化、さらには電動化やIoTといった技術の進化による産業構造の変化がグローバルレベルで進む。

すべての人に「生活の可能性が広がる喜びを提供する」ことを目指した2030年ビジョンの実現に向けて、世界中の一人ひとりの「移動」と「暮らし」の進化をリードしていくことを宣言。活動指針である「喜びの創造」「喜びの拡大」「喜びを次世代へ」の3つの視点をもって、企業姿勢である「質の追求による成長」を進めいく。

ホンダのトピック

ホンダが提案する新時代の都市型コンピューター

Honda e(2020年)



ホンダが新しいEVを開発するにあたり目指したのは、次のステージへの進化を感じるモビリティ。いろいろなモノやコトとつながりをもち、普遍的に心地良く、ウットに富み、つい微笑んでしまうようなユニークな存在でありたい。Honda eは、柔軟な発想でこれまでのクルマにない魅力を追求し、豊かな未来を実現できることを目指してつくりあげた。

インド市場発のクラシカルなロードスター

GB350(2021年)



世界最大規模の二輪車市場をもつインドで、ホンダのシェアを拡大するべく投入したハイネスCB350を日本にも導入。GB350の名称が与えられ、トラディショナルなロードスターとして人気を集める。リラックスできるライディングポジション、直立した人間筋エンジンやスチール製の前後フェンダーなど、すべてにおいて味わい深さを求めたバイクである。

世の中の動き	2020	2021	2022	2023
<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルス感染症拡大世界的に大きな影響となる 英国がEUに離脱 自動運転車レベル3解禁、「道路交通法」「道路運送車両法」など関連法規改正 	<ul style="list-style-type: none"> 東京五輪、パラリンピック開幕 改正地球温暖化対策推進法成立 二輪車メーカー4社、EVバイクの着脱式バッテリー標準化合意 	<ul style="list-style-type: none"> 政府、半導体産業強化ヘコンソーシアム(企業連合)立ち上げ発表 国土交通省、新型車へのEDR(イベントデータレコーダー)搭載を義務化 国土交通省、トラックバスの自動運転車「レベル3」を解禁 	<ul style="list-style-type: none"> 自動車検査証の電子化(国交省) 欧州連合(EU)がエンジン車販売を2035年に禁止する方針を転換し条件付きで認めることを決定 自転車用ヘルメットの着用努力義務化 	<ul style="list-style-type: none"> LGエナジーソリューションとEV用リチウムイオンバッテリー生産の合弁会社を正式に設立 GSユアサと高容量・高出力なリチウムイオンバッテリーに関する協業に向けた基本合意を締結 GMとホンダ、量販価格帯のグローバルEVシニアの共同開発に合意 中国で電動二輪車Cub e・Dax e・ZOOMER eを発表 東風汽車集団と共同で、ホンダの燃料電池システムを搭載した商用トラックの走行実証実験を開始 FI レッドブル・ホンダ コンストラクターズタイトル・マックス・フェルスタッペン 2年連続ドライバーズタイトル獲得 HondaJet 2600 Conceptをベースにした新型小型ビジネスジェット機の2028年に向けた製品化を決定 原付二種の新型レジャーバイクダックスi25発売 ホンダJet Elite IIを発表 HondaJet Elite IIを発表 ホンダTYPE R 30周年
<ul style="list-style-type: none"> 主なる本編掲載項目 	<ul style="list-style-type: none"> 四輪車量産開発機能、EGの四輪機能を開発し、一部に統合 電気自動車Honda eを発表 享徳時代新能源科技股份有限公司(CATL 中国バッテリー会社)とホンダ新エネルギー車用バッテリーに関する包括的戦略アライアンス契約を締結 いすゞとホンダが燃料電池(FC)大型トラックの共同研究契約を締結 GM アルティウムバッテリー採用のホンダ向け次世代EVの共同開発に合意 郵便配達用ペンリイ e導入合意 スクーディア、アルファウリ、ホンダのビール・ガスリ選手がFI初優勝 CBR1000RR-Rファイアーブレード(SC82)発売 HondaJet Elite Sを発表 小型ビジネスジェットコンセプト機HondaJet 2600 ConceptをNBAA 2021に参考展示 	<ul style="list-style-type: none"> 八郷社長退任、三部新社長就任(九代目) ホンダ・オブ・ザ・ユアミニファクチュアリング(HUM)とホンダ・ターナー(HTR)の四輪車生産が終了 狭山工場の完成車生産が2021年12月27日をもって終了 四輪車系「SEDB」一体となった新しい本部体制へ移行 ホンダ太陽・ホンダR&D太陽合併 ビジネス用電動三輪スクータージャイロ e: ジャイロキョボ e: を発売 FI レッドブル・ホンダ マックス・フェルスタッペン FI ドライバーズタイトル獲得 新車オンラインストアHonda ON オープン II代目 新型ビック発売 業務用作業機向け電動パワーユニット eGXの供給を開始 HondaJet Elite Sを発表 小型ビジネスジェットコンセプト機HondaJet 2600 ConceptをNBAA 2021に参考展示 	<ul style="list-style-type: none"> ソニー・ホンダモビリティ株式会社設立に関する合弁契約を締結 バッテリー交換ステーションHonda Power Pack Exchanger e:の販売を開始 GMとホンダ、量販価格帯のグローバルEVシニアの共同開発に合意 中国で電動二輪車Cub e・Dax e・ZOOMER eを発表 東風汽車集団と共同で、ホンダの燃料電池システムを搭載した商用トラックの走行実証実験を開始 FI レッドブル・ホンダ コンストラクターズタイトル・マックス・フェルスタッペン 2年連続ドライバーズタイトル獲得 HondaJet 2600 Conceptをベースにした新型小型ビジネスジェット機の2028年に向けた製品化を決定 原付二種の新型レジャーバイクダックスi25発売 HondaJet Elite IIを発表 HondaJet Elite IIを発表 ホンダTYPE R 30周年 	

チャレンジの軌跡 | 年表解説

- ※1: ホンダが初めての海外輸出はA型を台湾へ輸出したことから始まった。これは、大阪の代理店からのつながりでバイヤーを経由しての輸出であった。
- ※2: 総額4億5,000万円をかけた最新鋭の輸入工作機械の導入を決める。資本金600万円だった企業が決断した、未来への投資。導入された機械の一つ「ハーバードシブ HYDR-6A(愛称sip)は実働から63年を経過した今も生産技術統括部で稼働を続ける。「日々のメンテナンス成果もありますが、現在も大きな役割を果たしている。むしろsipじゃないと作れないものだってあるんです」と現場の信頼度も高い。轟音を響かせ息を止めるsipを見たら、本田宗一郎もさかしまい喜ぶところであろう。
- ※3: 1956年1月発行のホンダ社報23号に掲載された本田宗一郎による最初の社是は「わが社は世界的視野に立ち、顧客の要請に応じて、性能の優れた、廉価な製品を生産する。
- ※4: 1959年に海外初の販売現地法人であるアメリカ・ホンダ・モーターを設立し、自ら販売網の構築に着手した。現在ホンダの北米事業は、販売、生産、研究開発という機能をあわせ持った自立したオペレーションを確立しており、ホンダの海外地域事業の基手ともなっている。2000年代中頃の北米事業への累計投資額は約80億ドルを超え、北米での直接雇用は30,000人以上となった。
- ※5: 技術研究所がホンダから分離・独立し、(株)本田技術研究所を設立。目的は、研究開発をビジネスの都合から切り分けることで、目の前の事業の浮き沈みに左右されることなく、将来を見据えた研究を自由に行える環境を整え、斬新で独創的な産品を産み育てたいという創業者の想いによるものだ。以来60年にわたって、ホンダの屋台骨を支える革新的な技術を開発し、市場へと送り出してきた。2019年2月に二輪車を2020年4月に四輪車を一体運営体制へと変更し、二輪車・四輪車開発を担う部門はホンダと融合し、本田技術研究所は、将来の価値創造に向けて未知の世界を開拓し、先端研究開発を担う機能に特化・注力することになった。「量産というものは、100%以上成功させないといけない。片や将来に成るような先端的技術は、99%失敗すると思えるような難しいテーマにも強い意志で取り組まないとはいけい、そのため、この2つは分けるべきだと結論に達し、再編に踏み切ったのである。
- ※6: 四輪車用としてガスタービンエンジンの研究を目的として発足、この時のメンバーが後のHF120につながるエンジン開発に重要な役割を果たすこととなる。
- ※7: HFTの原型となるHRDを搭載したホンダ初の二輪AT車。
- ※8: このCB450のエンジンを原型としてN360のエンジンが開発された。
- ※9: 初代のOHV(オーバーヘッドバルブ)エンジンからOHC(オーバーヘッドカムシャフト)に変更され、細かい改良を受けながら数十年にわたってつくり続けられた。
- ※10: 1965年にC100を100台、郵政省に納入したのを皮切りに、1971年には郵政レッド塗装のホンダデリバリーMD(=Mail Delivery)90、通称「郵政カブ」を開発し、2,625台を納入した。さらに1972年には、14インチタイヤの現在のモデルの原形を完成させ納入、1973年にC100/70の生産も開始し、人々の円滑な通信にも貢献している。
- ※11: アイデアコンテスの作品が、商品化された大ヒットとなった。当初、協力メーカーに委託して生産していたが需要に追いつけず、急遽、自社製作所でも生産することになった。ホンダで生産した唯一エンジンのない乗り物である。(浜松製作所では8カ月間生産した)
- ※12: 日本酸素(株)とホンダが共同開発した世界初のステンレス製真空二重構造のガラスを使わない魔法瓶、アクト・エルより発売された。現在は日本酸素から分離したサーモス(株)がTHERMOSブランドとして色々な製品が商品化されている。
- ※13: シティとモトコンの発表により、四輪車に二輪車を搭載して行動することで、バイクの機能とクルマの機能が掛け算的に広がり、アウトドアライフの新しい使い勝手を創りだすことを提唱した。これは二輪車、四輪車を持つホンダの強みをフルに発揮した世界で初めての試みであった。
- ※14: リッター当たり105km/hの低燃費を実現したスーパーカブは、1982年にはリッター150km、さらに1983年にはリッター180km/hの超低燃費を実現したタイプを発売している。*いすゞも30km/h/定地走行テスト値・50cc車。
- ※15: ホンダは「需要のあるところで生産する」という考えのもと、生産の現地化を進めたいが、世界最大の自動車大国である米国においては、SEDすべての現地化による体制強化が必要と考えた。そこで、1984年に開国前のホンダ・リサーチ・オブ・アメリカ(1986年にホンダR&D・ナースアメリカ:HRA)を設立した。
- ※16: 燃料電池・ロボテクス・航空機および航空機エンジンなど、未来を見据えた多様な研究が行われた。これらは、実用化に向けた開発が進められ、一部はすでに製品化されている。航空機の研究開発は、基礎研究所から量産開発組織に移行して続けられ、2015年末にHondaJetとして製品化した。
- ※17: 1986年、ホンダはパリ・ダカールラリーにファクトリーレーサーNXR750を投入し、1989年まで4年連続優勝を果たした。アフリカ横断(XRV650)はそのNXR750譲りのテクノロジーを継承したアドベンチャースポーツモデルとして1988年に上市。NXRの装備とイメージを具現化した。エンジンはトランザルプ600と同じ水冷52V型2気筒583cc、SOHC3バルブ2プラグだった。1989年と1990年には、このXRV650iに乗って一般公募のライダーがパリ・ダカールラリーに参戦するアドベンチャー・ダカールをホンダが企画、XRV650は市販車無改造クラスで2年連続優勝し、ヨーロッパを中心にその人気を拡大させた。
- ※18: RVが手薄だったホンダのラインアップの拡充を図る為と兼用車のラインアップが少ないいすゞとの契約締結であった。
- ※19: 機体構造すべてにコバロジット材を用いた超小型ビジネスジェット機。実験機ではあったが後に世界最初のオールコバロジット型ビジネスジェット機という位置づけになった。
- ※20: 「PRO'S」は顧客の多岐にわたる要望に対し、オールマイティな対応ができるプロフェッショナルな販売店の意を込めて名付けられた。
- ※21: 量産二輪車世界初となる水冷・4ストローク・50ccエンジンを搭載したジューノ クレアは国内新排出ガス規制値の1/2を達成し、従来2ストロークエンジンに比べ、約30%の燃費向上(ホンダ同排気量スクーター比較値、30km/h/定地走行テスト値)を実現、車体には国内スクーター初のアルミダイキャストフレームを採用、今後のホンダスクーターの基本骨格とするべくモジュール構造を採用し、生産効率の向上を図った。
- ※22: 二輪事業において、多様化するお客様の期待に応え、満足度の高い効率的な営業活動を展開するために日本国内の二輪営業機能を集約した総合販売会社。商品企画やマーケティング、モータースポーツや宣伝活動など、顧客満足度の向上につながるさまざまな活動を展開している。
- ※23: ドリーム店は、高まるお客様のご要望にお応えするために誕生した「プレステージ・ディーラー」である。これまでも、多くのお客様に満足していただくことが目標であったが、ドリーム店の目指すところは、ホンダの二輪車に拠っていただくお客様、すべての方に満足していただくこと、最新モデルはもちろん、各種イベントや安全運転講習等、二輪車の「楽しさ」すべてを得意し、商品も売るだけでなく、お客様の想いを直接伝えられるお店、情熱を持って、お客様に楽しくて店として導入された。
- ※24: お客様視点の原点に立ち、2006年3月に、販売チャンネルをHondaCarsに統合した。1チャンネル体制に相当し、最適な販売網の再構築や、大都市部での店舗の大型化、HondaCarsの新しいコンセプトを取り入れた店舗の開設など、販売体制の強化を推進目的として設立された。
- ※25: DN-01は新しい価値の創造と新たなモーターサイクルライフの提案を目指し、快適なスポーツライダーをコンセプトとして開発。新たに採用しているトランスミッションは油圧機械式無段変速機構のHFT(Human Fitted Transmission)、2タイプのパルフトラックモードに加え、手元のボタン操作で行う6速のマニュアルモードを装備している。また、油圧機械式無段変速機構としては世界初のロックアップ機構も搭載し、走行中でもライダーに変速のショックを与えない滑らかな走行が可能とし、これまでのスポーツモデル以上に簡便で快適なライディングを実現している。HFTは1962年にジュノM85に搭載されたHRDから進化を続け、初めて大型二輪スポーツモデルに搭載された。
- ※26: ホンダは3つのハイブリッドシステムを発表。1モーター式SPORT HYBRID Intelligent Dual Clutch Drive、2モーター式SPORT HYBRID Intelligent Multi Mode Drive/Plug-in、3モーター式SPORT HYBRID SH-AWD (SPORT HYBRID Super Handling-All Wheel Drive)。
- ※27: 1958年の生産から50年以上の間、機能性の向上を繰り返しつつも、一貫したデザインコンセプトを守り続けた結果として、デザインを見ただけでお客様にホンダの商品であると認識されるようになったことが特許庁の審査で認められ、立体商標登録に至った。
- ※28: プラチプリ工場には、「人の作業と先端技術を最適化し、品質の高い製品を市場に提供する」というコンセプトに基づき、当時のホンダの最新、高効率の生産技術が採用されている。その新技術の中には、四輪完成車の量産では世界初となる、完成車組立のメインラインに組み込まれる流動型のセル生産方式ライン「ARC(Assembly Revolution Cell)ライン」などが含まれている。
- ※29: ホンダの国内二輪販売チャンネルは当時5つの販売体制で運営されていたが、これを再編し、Honda DreamとHonda Commuterの2チャンネル体制に移行。Honda Dreamは、スポーツモデルを中心にホンダ二輪車のフルラインナップを取り扱い、ライフスタイルの提案や高品位なサービスを提供し、Honda Commuterは、250cc以下のコミュニティモデルを中心に取り扱い、生活に密着した利便性の高い商品と信頼のサービスを提供している。今回の販売チャンネルの刷新により、スポーツモデルとコミュニティモデルそれぞれのお客様ニーズに的確に応えられる販売網の構築を目指している。
- ※30: アルティウムバッテリーを搭載したGMのグローバルEVプラットフォームをベースに、ホンダ向けの新型電気自動車(EV)二車種を共同開発する内容に合意。また、GMとホンダの関係は20年以上前から始まっており、燃料電池やバッテリー、自動運転モビリティ・サービス事業専用車「Cruise Origin(クルーズ オリジン)」といった協業にも取り組んでいる。
- ※31: ホンダの最先端の環境・安全技術をはじめとするモビリティ開発力、車体製造技術およびアフターサービス運営の実績と、ソニーが保有するイメージングセンシング・通信・ネットワークおよび各種エンターテインメント技術の開発・運営の実績を持ち寄り、利用者や環境に寄り添い、進化を続ける新しい時代のモビリティとモビリティ向けサービスの実現を目指している。

モータースポーツ



マックス フェルスタッペン選手

創業期からの 変わらぬ想い —— F1参戦60周年

1964年8月2日、ドイツのニュルブルクリンクで開催されたFIA※フォーミュラ・ワン世界選手権（以下、F1）第6戦ドイツグランプリに、アイボリーホワイトの車体に赤い日の丸をあしらったHondaのF1マシン、RA271が出場しました。

初の四輪車、T360とS500を発売してから1年後にHondaは四輪レースの世界最高峰に挑んだのです。エンジンもシャシーも自社開発したRA271は、ドイツでは13位完走するも、その後2戦はリタイアに終わりました。翌1965年は大幅な軽量化を図ったRA272を投入。最終戦のメキシコGPでそのRA272がHondaにF1初優勝をもたらします。1961年の二輪レース最高峰のマン島TTレースでの勝利と並び、四輪でも頂点レースで勝利をつかみました。



誰もが無理だと思ふようなことに果敢にチャレンジする精神は、創業期からレースを通じて磨かれてきました。

2024年はF1初参戦から60周年であり、継承されるチャレンジ精神を象徴すべく、左のロゴを制定しました。

世界の最高峰の場で人と技術を磨く、これが創業期からのHondaのレーシングスピリットです。

夢よ再び —— 新たなる挑戦

2023年5月24日、HondaはAston Martin Aramco Formula One® Teamと組んで、2026年シーズンからF1に再び参戦することを発表しました。

- F1はカーボンニュートラルの実現に取り組んでおり、2026年に導入される新レギュレーションでは、
- 1) 100%カーボンニュートラル燃料の導入
 - 2) 総出力に占める電気エネルギーの割合をエンジンパワーと同様の50%程度（現在の約3倍の出力）に高める

という大きな改定が行われます。このレギュレーション変更は、Hondaの目指すカーボンニュートラルの方向性に合致しており、その実現に向けた将来技術の開発に大きな意義を持つことから、参戦を決定しました。

Hondaのレース部門である株式会社ホンダ・レーシング（HRC）は米国の四輪レース開発子会社の社名を「Honda Racing Corporation USA（HRC US）」に変更するとともにさらに連携を強め、また欧州にもHRC UKを設立するなど、着々とグローバル体制を整えています。

※ Fédération Internationale de l'Automobile（国際自動車連盟）の略称

モータースポーツ



「不可能なことは何もない」

2024年4月5日、Honda F1初参戦から60年目の春、鈴鹿サーキット内に「Honda RACING Gallery」がオープンしました。

オープニングに駆け付けた二度のIndy500優勝者の佐藤琢磨選手は、「不可能だと思われることでも、色々な角度からアプローチしてみることで、最終的には達成できることを経験してきました。僕は不可能なことは何もないと思っています。いまの僕の夢はもう一度Indy500のチャンピオンになることですが、同時に若い世代のドライバーたちの海外での挑戦を支援することが、僕の次なる挑戦ですね」と夢を語りました。



佐藤 琢磨選手

“No Attack, No Chance”をポリシーにする琢磨選手はホンダ・レーシング・スクール・鈴鹿（HRS鈴鹿、旧：SRS）の出身で、2019年からスクールのプリンシパル（校長）を務めています。

夢を次世代へ

2024年現在、VISA Cash App RB Formula One TeamからF1に参戦している角田裕毅選手はホンダ・レーシング・スクール・鈴鹿出身の選手です。5歳のときからレーシングカートに乗り始め、“誰よりも速く走りたい”という欲求を満たせるのが何よりも幸せだという角田選手は、2019年からはFIA-F3で欧州を中心に世界を転戦。2020年にはF2にステップアップし、FIAルーキー・オブ・ザ・イヤー受賞と、夢に向けて着実に進歩していきました。いよいよ2021年からF1に参戦し、この年、入賞を7回、最高位4位の成績を残しました。

「僕が追求したいのは速く走ること。それが何より自分にとって楽しいことです。いろんな状況や場面でほかのドライバーたちが僕より速く走る時は悔しい想いをします。同時に、僕が彼らに勝り一番になったときは本当に幸せを感じるんです。夢はF1の世界チャンピオンになることですね。さらに大きな夢は、偉大なドライバーたちが打ち立てたすべての記録を破ることです」角田選手の挑戦はチャンピオンの獲得にとどまりません。

いまや日本を代表するレーシングドライバーに成長した角田選手は、2025年にF1で5年目のシーズンを迎えます。



角田 裕毅選手

スポーツ活動

Honda Sports Challenge

Hondaは、1960年創部の埼玉製作所の硬式野球部から始まり、60年以上にわたり企業スポーツ活動に取り組んできました。100年に1度の大変革期において、飛躍の源となる「チャレンジ精神」がいつそう求められるなか、挑戦を体現し、その感動を多くの人と共有できるスポーツの重要性は増しており、その可能性を最大限に引き出すべく、企業スポーツの強化に取り組んでいます。

「Hondaのスポーツ活動を通じて、挑戦する人々を増やし、あらゆる人の人生を豊かにする」というビジョンのもと、「Honda Sports Challenge」を活動スローガンに掲げ、挑戦をコアとした「たのしみ・はぐむ・つなげる」という3つの方向性で取り組んでいます。

さまざまな競技で活動するとともに、大会協賛やアスリートのスポンサーにも取り組むなど、幅広い領域でチャレンジを続けています。

公式スポーツクラブ(日本)

陸上競技、ラグビー、野球、サッカー、ソフトボールの5競技7クラブが、夢の実現に向けて挑戦を続けています。



Honda陸上競技部



三重ホンダヒート
(ラグビー)



Honda硬式野球部/
鈴鹿野球部/熊本野球部



Honda FC(サッカー)



Honda Reverta
(ソフトボール)

スポンサードアスリート

国内外で活躍するアスリートの夢の実現をサポートしています。

アンバサダー



国枝 慎吾



宮里 藍

所属アスリート



岩井 明愛・岩井 千怜(ゴルフ)



協賛アスリート

ゴルフ

笹生優花

車いす陸上

カテリーヌ・デブルナー/
スザンナ・スカロニ/西田宗城/
マニュエラ・ジャー

大会協賛

スポーツ振興に向けて、各種大会を応援しています。



熱気球ホンダグランプリ



大分国際車いすマラソン



スタンレーレディスホンダ
ゴルフトーナメント



Honda陸上競技部
小山 直城

世界のトップマラソンランナーと戦い日本記録を更新したい

小山選手の名が広く知られるきっかけとなった2023年10月のマラソングランドチャンピオンシップでの優勝。駅伝で走りたいという幼少期の夢をHondaで叶え、新たなチャレンジとしてマラソンへ移行して早々の快挙に。「純粋に陸上が好きで、走ることが楽しい。いまは日本記録を更新して名前を残したいという夢を持って挑戦を続けています。そして海外のレースにも挑戦し、世界のトップランナーたちと戦いたいです」。誰よりも走ることが好きという想いを胸に、世界への挑戦は続きます。

世界で戦えることを証明したい

2023年の世界陸上では、3000m障害で日本人として20年ぶりに決勝に進出。「世界のトップ選手の背中を追いつけているうちに、彼らに勝ちたいという想いが芽生え、自分がどこまで行けるか可能性を見てみたいとなりました。世界を相手に戦い、結果を出すことにこだわりたいという青木選手。「一つひとつステップアップしてきたここがゴールじゃない。世界一にならない限り満足しません」。夢を追うなかで、立ち止まっている時間はない。さらなる高みに向けた挑戦はこれからも続きます。



Honda陸上競技部
青木 涼真



三重ホンダヒート
北條 拓郎

夢は日本代表として世界で勝つこと

2024年春、秩父宮ラグビー場で華々しいデビューを飾ったルーキー北條選手は、ゲームの流れを変える好プレーで存在感を放ちました。「大舞台でも緊張せずプレーに集中できます。学生時代、試合に出られない悔しい時期を経て培った貪欲さを武器に、誰よりも積極的にボールに絡んでいきたい」「夢は日本代表としてワールドカップで世界の強豪チームに勝つこと。とにかく勝ちにこだわりたい」。夢を追いつけるルーキーの目はすでに世界を見ている。ラグビーへの強い情熱を胸に、挑戦は始まったばかりです。

世界大会で勝負強さを発揮したい

「できることなら一生野球をしたい。自分にとって野球は人生です」と真っすぐな眼差しで語る小口選手。どんなに苦しい練習や悔しい経験をして、野球が好きでたまらない。チャンスに強く、入社1年目は全国の舞台で打点をあげ、瞬間にチームの中核に。「目標は世界大会で持ち前の勝負強さを発揮すること。そして、プロへの道を切り拓き、いままで支えてくれた家族に恩返しをしたい」。その想いを原動力に、小口選手は夢に向かって走り続けます。



Honda硬式野球部
小口 仁太郎



Honda所属 女子ゴルフ
岩井 明愛・千怜

姉妹二人で叶える夢。目標は世界での勝利

互いに切磋琢磨し、姉妹そろって優勝を重ね、トッププロとして成長を遂げる岩井明愛選手と千怜選手。両親の教えである「正々堂々」「人にやさしく」というスポーツマンシップを胸に、プレー中も常に相手の選手を思いやり、笑顔でファンの声援に応える二人の人は、ツアー参戦選手のなかで強い存在感を示しています。二人の目標は世界の舞台上で戦い勝利すること。Hondaは夢に向かってチャレンジする姉妹を応援します。